

現代評論文の学習を通して思考力・記述力を高める 高等学校国語科授業の研究

— 山崎正和の評論「水の東西」を用いた「比べ読み」「重ね読み」の実践 —

田中 宏幸・小野 奈央¹

(2011年10月6日受理)

A Study on Developing Abilities of Thinking and Expression Through Studying Critical Essays in Japanese Classes at a Senior High School

— The practices of comparative reading using essay “*Mizunotozai*” written by Masakazu Yamazaki —

Hiroyuki Tanaka and Nao Ono¹

Abstract: This research aims to find the effective way of developing the students' abilities of thinking and expression to a higher level through reading critical essays in Japanese classes. In order to improve students' abilities, students read two essays. After reading two essays written by different authors or the same authors, students thought about the topic by themselves and expressed their thoughts from their own points of view. Micro-teaching and action research programs seemed to broaden the students' perspectives and enable them to probe ideas deeper. The result shows that using several reading materials is effective to broaden students' ways of thinking and means of expression.

Key words: teaching critical essays, comparative reading of different essays by same author, comparative reading of essays on similar topic by different authors, ability of thinking, ability of expression

キーワード：評論文の学習指導、重ね読み、比べ読み、思考力、記述力

I. はじめに（問題のありか）

毎日の授業において、大学入試にも対応できる学力を育成しつつ、且つ、生徒が現代社会を生きていくうえで、問題解決に必要な思考力や文章表現力を身につけさせるにはどうしたらよいのだろうか。

生徒が希望する進路を実現することのできる学力を身につけさせること（いわゆる“受験指導”）だけが教科指導ではない。生徒がそれぞれの人生を選び取る力の基盤となるもののうち、重要なのは、自ら思考する力、自己を表現する力であろう。思考力を用いて自

らが直面する課題を解決しようとすることや、他者とのつながりを強くしたり社会生活を営んだりするために言葉で自己表現することは、日常生活において不可欠だからである。就職・進学などで進路選択を迫られる高等学校においては、生徒が自分の未来を切り拓いていくために必要な力を総合的に育成することが求められる。学力の基礎・基本を徹底させるのみならず、「生徒の思考力・記述力を高い次元にまで伸長させる」方法について研究し、日々の授業において活かせる実践方法を確立させることが重要である。

国語の学力は、すべての学問の基盤になるものであるから、新学習指導要領に移行しようとしている今こそ、1年次から3年次までに育成すべき力を検討し系

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

統的に整理し、効果的なカリキュラムを考えることが必要となる。この研究は、本来は国語の科目全体を通して総合的に行わなければならないが、本稿では、実習における授業内容との関係上、現代文の評論文教材を扱う研究に限定し、高等学校国語科において定番教材と言われている「水の東西」を中心に論じることとする。

Ⅱ. 実践研究の概要

1. リサーチエスチョンについて

本研究科「教職高度化プログラム」(中等教科教育開発プログラム)は、高度で総合的な実践的指導力を持った教員を養成するプログラムである。このプログラムでは、実践理論と実践方法を同時に学びつつ研究を進めることが求められ、自らの問題意識の中から課題を設定し、研究仮説を立て、授業プランを作り、「アクションリサーチ」という実習で検証していくという研究方法が推奨されている。

今回の実践研究では、生徒の思考力・記述力を高めるための方策として、一つの単元で複数の評論文教材を読解させる「比べ読み」「重ね読み」を用いることにした。一つの教材のみを読解し、考えさせる授業を行うと、学習者はその教材で述べられている内容の範囲内でテーマの価値を判断するという事態に陥りやすい。そのような一面的な思考に止まらないようにするためには、複数の教材を与えることが有効であろう。一つのテーマに関して複数のアプローチの仕方があることを示したり、異なる立場のものを紹介したりすることで、学習者がテーマについて多角的に思考できるようになると期待できる。このように考えて、リサーチエスチョンおよび仮説を以下のように設定することにした。

【リサーチエスチョン】

評論文教材を通して、「読むこと」の活動をどのように発展させてゆけば、現代の課題を解決し未来を切り拓くことのできる思考力および記述力を生徒たちに育成することができるか。

○仮説1

評論文教材の論理展開を構造図にさせたり、キーワードについて説明させたりする活動を系統的に設定することで、生徒たちが主体的に読解をすることができるようになる。

○仮説2

同様のテーマが論じられている評論文を比較して読むことで、多様な視点を学ぶことができ、生徒たちの

思考が深まる。

○仮説3

扱った教材それぞれの視点を理解させた上で、自分の意見を文章化させることで、生徒たちが論理構造を意識しながら考えを表現することができるようになる。

以上のように、読解→思考→記述という活動を授業の大枠にすることで、学習者は、吸収した知識を覚え込んで終了するのではなく、新知識・新知見について思考する中で考えを磨き、思考内容の文章化という形で思いを表出するように展開させることができる。さらに、読解を基に思考した事柄を他者が理解できるように表現することで、他者と交流することができ、そのことが自分の思考をさらに発展させる契機にもなる。よって、単元目標として、学習者それぞれが自己の思考を文章化することまでを求めることとした。

2. マイクロティーチングにおける模擬授業実践

「教職高度化プログラム」には、「国語科教育マイクロティーチング」という授業がある。「国語科教育」という名称になっているが、学期の前半は、教職高度化に所属する大学院生が教科の枠組みを越えて合同で行う授業として計画されており、それぞれが20分間の模擬授業を行うことになっている。

この模擬授業においては、「比べ読み」を試みた。山崎正和の「水の東西」と、寺田寅彦の「日本人の自然観」(抜粋)を読み比べ、それぞれの特徴を捉えさせるのである。

【指導事項】

- ①本文の内容を叙述に即して的確に読み取る。
(C読むことア)
- ②本文だけでなく、同様のテーマで書かれた他の筆者の文章も比較して読み、ものの見方、感じ方、考え方を広げ、深める。
(C読むことエ)

【単元名・使用教材】

「日本文化と西洋文化それぞれの特徴をとらえ、比較しよう」

- ①教科書教材「水の東西」(山崎正和, 1977)
- ②プリント教材「日本人の自然観」(寺田寅彦, 1935)

【授業の流れ】

- ①「水の東西」本文の読解、文章の構造図化
※表形式の構造図モデル(表の縦軸:日本対西洋/横軸:事例の並置)の提示ー「対比」構造の確認
- ②「日本人の自然観」本文の読解、文章の構造図化
※構造図モデル(整理軸のラベル例:「事例の並置」または「主張と根拠」)の活用
※整理方法を学習者に考えさせるー「分類」の思考
- ③「比べ読み」をさせる
(a)二つの文章に共通する考えに傍線を引かせ、対

応箇所を確認させる。

(b) 二つの文章の相違点を挙げさせる。

以下のア～ウの3つの観点から相違点を考えさせる。「(アイウのいずれか)の観点から見ると、～のような違いがある」というように言語化させる。

ア 説明の仕方(主張の明示性。暗示的象徴的表現)

イ 事例の挙げ方(見えるもの、見えないもの)

ウ ものごとのとらえ方(着眼点・発想法)

④「語句の理解」「文章の解釈」のための発問

(a) 象徴的・比喩的な語句の意味を説明する。

(b) 説明されていない「理由」を推理して説明する。

⑤「考えの形成」のための発問 → 交流を促す

(a) 二つの評論のどちらに共感するか。(判断・評価)

(b) その理由は何か。(できれば三つ挙げる。重要順に挙げる。)

このように「比べ読み」の授業を創ることによって、「水の東西」という教材について、単独で教材分析をしている時には気付かない新たな魅力を発見することができる。

例えば、「水の東西」は「東洋対西洋」の対比構造の文章として扱うことが多い。「水の東西」の先行実践事例¹⁾を収集して分析すると、ほとんどが「水の東西」における対比構造を把握させ、それを基に文章を書かせるといった活動に結びつける指導をしている。

しかし、本文内容を比較しながら構造図を作成すると、「対比」的な構造が明確なのは寺田寅彦の文章の方である。「水の東西」は、タイトルからも窺えるように東洋対西洋の「対比」ではあるが、西洋側についての言及が少ないという特徴が見て取れる。寺田寅彦と山崎正和という二人の筆者の職業的な性格(物理学者と劇作家・演劇学者)、時代性(昭和初期と戦後)、想定している読者等の相違が、論じ方の違いを生んでいるのであろう。類似したテーマで異なった論じ方をしている教材を組み合わせ、その共通点と相違点を比較分析する「比べ読み」という学習方法は、教材の新たな魅力の発見を導くとともに、学習者の思考力を高めていくのに有効であると考えられるのである。

3. アクションリサーチ実習について(概要)

(1) アクションリサーチ実習Ⅰの授業計画

「アクションリサーチ実習Ⅰ」²⁾では、「重ね読み」を試みた。実習校において使用している教科書(『精選国語総合[改訂版]現代文編』(筑摩書房, 2009年)には、山崎正和「演じられた風景」が採録されており、この教材と組み合わせ、「水の東西」を扱うことにしたのである。

この授業の概要は、以下の通りである。

【指導事項】

①本文の内容を叙述に即して的確に読み取る。

(C読むことア)

②本文だけでなく、同様のテーマで書かれた他の筆者の文章も比較して読み、ものの見方、感じ方、考え方を広げ、深める。

(C読むことエ)

【単元名・使用教材】

「評論文を読み比べ、筆者のものの見方について検討しよう」

①「演じられた風景」(山崎正和, 1977)

②「水の東西」(山崎正和, 1977)

【単元のねらい】

単元で用いた「演じられた風景」と「水の東西」は、いずれも山崎正和の著書『混沌からの表現』に載っている文章で、高等学校教科書にしばしば採録されている。二つの文章は『混沌からの表現』の第4章「日本人の心とかたち」にまとめられているものであり、筆者の思考の展開の延長線上に位置している。二つの文章の根底には共通する考えがあるので、二つの文章を重ね読みすることで、筆者が主張したい事柄がさらに明確になるのである。

授業において先に読解させる「演じられた風景」は、「庭」を題材にして、日本人の自然観や美意識について論じたものである。「日本の庭は単なる自然の延長ではなく、日本文化に根ざした美意識が反映された、高度な作為の結晶なのだ」という筆者の考えは、学習者にとって新しい発見になるものだと思う。「庭」という身近なものから日本文化について思考する契機が得られ、自発的に周囲の事物に興味・関心を持つことで視野を広げることができることの面白さを味わわせたい。

また、「演じられた風景」の読解後、思考を深めさせるために「水の東西」を読ませる。この「水の東西」は、「水」という身近なものを題材に、東洋と西洋においてそれぞれ「水」がどのように用いられて生活を彩ってきたか、具体例を用いて対比させながら、日本の伝統文化に根ざした感性についての見解へと論を展開させている。

二つの文章を関連づけて読解させた後、山崎正和の考える「日本人の自然観」「日本人の美意識」とは何かを理解させ、認識させようとして、山崎正和の思考の仕方について、または筆者の論じ方について、生徒たちが思考を深めることができるようにする。

【単元の目標】

(1)「演じられた風景」本文の内容を叙述に即して的確に読み取る。

(C読むことイ)

(2)「水の東西」本文の内容を叙述に即して的確に読み取る。

(C読むことイ)

- (3) 二教材の内容を関連づけて、筆者の考え方をとらえる。さらに筆者の論じ方についても思考することで、ものの見方、感じ方、考え方を広げ、深める。(C読むことエおよびオ、言語活動例エ)

【単元の評価規準】

《関心・意欲・態度》

- ①筆者の文章の内容やテーマに関心を持ち、正確に読解しようとしている。
②筆者の文化観や論じ方について、自分の思考を深めるよう努め、評価しようとしている。

《読むこと》

- ①本文を文脈に即して的確にとらえることができる。
②同一筆者の二つの文章を重ね読むことで、日本文化の特質について思考を深め、筆者の文化観や論じ方について評価することができる。

《知識・理解》

- ①本文中の語彙を理解し、本文の読解に役立てることができる。

【授業と評価の計画（全4時間）】

次	時	学習内容	評価規準
1	2	「演じられた風景」 読解作業	筆者の文化観を的確に読解している。
2	1	「水の東西」 読解作業	筆者の文化観を的確に読解している。
3	1	「演じられた風景」と「水の東西」の関連づけ（筆者の論じ方について学ぶ）	同一筆者（山崎正和）の二つの文章を重ね読むことで、「演じられた風景」「水の東西」に共通して述べられている日本文化の特質について思考を深め、筆者の文化観や論じ方について評価することができる。

(2) アクションリサーチ実習の授業の実際

○第1次 「演じられた風景」の読解

【第1時】

第1時は、「演じられた風景」の主張をおおまかにとらえさせることを主眼とした。筆者の主張が述べられている「むしろ日本の庭は『見立て』を通じて、外なる大自然を『名所』にまで人工化している」という一文に着目させた。この文中の「見立て」および「名所」はこの本文のキーワードであることも併せて確認したうえで、本文中でそれらのキーワードについて言い換えられている部分をもとに、本文中での意味を考えさせ、ワークシートに記述させた。生徒を指名し、作成した解答を黒板に書かせ、解説を加えた。その後、キーワードの意味を本文に当てはめて確認することで、筆者の主張を大まかに把握できることを示した。

【第2時】

第2時は、2つの発問を中心に、筆者の主張に迫ることをねらいとした。「演じられた風景」というタイトルにもある、「演じる」という表現に着目させ、「日本の庭が大自然を演じている」とはどういうことかについて考えさせた。「演じる」とは、「庭を『見立て』を通して表現して作る」ことを擬人法を用いて表現しているものであることを確認させた後、各自でワークシートにまとめさせた。生徒を指名し、黒板に書かせた解答を用いて説明をして、筆者の主張の内容を共有した。最後に、「日本の美もずいぶん見くびられたものだ」という一文に着目させ、筆者がなぜこのように述べているのかを考えさせた。各自で考えさせた後、「日本の庭は単なる自然の延長ではなく、『見立て』の精神に基づいて手を加えられている、高度な作為の結晶である」という筆者の主張を改めて確認させた。

○第2次 「水の東西」の読解

1時間で読解を終えなければならなかったで、「水の東西」が日本（東洋）と西洋の比較であることに着目させ、対比的に用いられているキーワードを明らかにすることで本文の内容を大まかにとらえさせ、筆者の主張に迫るようにした。「見えない水」「目に見える水」のキーワードに重点を置き、発問をして、生徒を指名しながら答えさせていった。最後に「鹿おどし」について「日本人が水を鑑賞する行為の極致を現す仕掛けである」と表現されていたことをとりあげ、次時でこの点を考えてと予告した。

○第3次 「演じられた風景」「水の東西」の関連づけ

前時に学習した「水の東西」の最終行に「あの鹿おどしは、日本人が水を鑑賞する行為の極致を現す仕掛けだといえるかもしれない」とあることを想起させる。その後、「演じられた風景」における“庭”も、「水の東西」における“鹿おどし”も、人の手で作られた“仕掛け”である点で共通していることを学習者に確認させつつ、筆者の山崎正和がこれらの“仕掛け”の特徴をどのように考えているのかについて、ワークシートにまとめさせた。ワークシートの問題は、以下のようなものであった。

筆者の山崎正和は、日本庭園や鹿おどしなどのような「仕掛け」の特徴をどのように考えているのか。「演じられた風景」と「水の東西」の両方の文章をふまえて説明しなさい。

この問題に取り組みさせたのは、「演じられた風景」「水の東西」の両方の文章の見直しをさせ、二つの文章の根底にある筆者の文化観について思考させようという

意図であった。数名の生徒を指名し、黒板に解答を書かせた。以下はその時に実際に授業で用いた解答である。(波線は授業者)

- (O) 日本庭園や鹿おどしの中に、典型的なイメージを作り出して本来の魅力を作り出し、人々にそれらを感じさせるという特徴。
- (S) 自然の中の本来の美しさを引き立て、日本人の感性や思想を表現したもの。
- (K) 人の持っている感覚(見・聞・感)を利用して、そこに存在しているもの以上のものを表現するということ。

これらの生徒達の解答に解説を加えながら、「仕掛け」という「物」を通して、その物の持つ本質的な魅力を表しつつ、自然美や思想等を反映させるという営みが、日本文化の根底にある、というふうに山崎のとらえ方をまとめた。その後、山崎正和の論じ方について、①「日本と西洋を比較している」、②「日本の文化を高く評価している」、③「西洋についての言及が少ない」という3点の特徴を授業者の方で示し、「演じられた風景」「水の東西」の書かれた年代についても説明をした。そのうえで、「筆者山崎正和の考え方について、あるいは筆者の論じ方について、あなたはどうか考えますか」と問いかけ、どちらかのテーマを選んでワークシートに書くように指示した。(この内容については後述する。)

Ⅲ. アクションリサーチ実習についての考察

(1) 学習者の認識と思考の深化

新学習指導要領の解説において、「思考力」とは、「言語を手がかりとしながら物事を筋道立てて考える能力」とある。また、「思考力を伸ばすとは、物事の筋道が分かるという段階からさらに進んで、問題を解決しようとする創造的かつ論理的な思考力を身につけること」(p.10)と定義づけられている。この定義を発展させれば、現代文の授業において育成しなければならない思考力とは、「授業で扱った文章に描かれたテーマを読解して認識を深め、そのテーマについて評価したり価値づけたりする力、自己の意見を形成し、表現する力である」と考えることができる。

この単元においては、文章を読解させ、日本文化についての筆者の考え方を認識させようとして、筆者の思考の仕方、論じ方について生徒自身がどのように考え、

評価するのかということ我问うた。読解を通して知識を得たことで学習者の認識は深まる。またその認識に対して自分の既存の知識や価値観を照らし合わせて考えさせ、自分の考えを明確に表現し評価できるようになることを、学習者の「思考の深まり」としてとらえた。以下に詳細を記述する。

この単元の4時間目では、学習者にワークシートを配布し、「演じられた風景」と「水の東西」を関連づける問いに取り組みさせた。その後、筆者山崎正和の主張をまとめたうえで、筆者の論じ方の特徴を示した。それをふまえ、次のように問いかけ、記述させた。

「演じられた風景」と「水の東西」を読みました。これらの文章に共通する「日本文化」についての筆者山崎正和の考え方について、あるいは筆者の論じ方について、あなたはどうか考えますか。どちらかを選び、自分の考えたことを書きなさい。

学習者の書いたものの中で、代表的なものを、以下で紹介する。(波線は授業者)

①筆者は、「日本文化」について、本来の魅力を引き出し、最高の状態にするために、人の手が加えられたものと考えています。私は今まで、日本文化は、自然が美しいことなのだと思っていましたが、筆者の文章を読んで、なるほどと思えました。確かに自然そのままでも美しいですが、人の手を加えると、よりさらに魅力的になります。新しい考え方を知ることができてよかったです。

②日本の庭園は、人工化されているから美しい、という意見は私にとって目新しかった。人工的にうまく自然の本質的な部分を表していたから気付かなかったのだと思う。

私は別に山崎さんの考え方を古くさいとは思わない。むしろ、先ほど述べたように、私にとっては目新しいものである。西洋について彼があまり述べていないのは、西洋と東洋では、文化が全く違うからだ。文化が違えば、各々引きつけられる魅力も違ってくるだろう。比較の仕様がないから、述べないのだと思う。

③私は筆者の意見自体には賛成である。日本文化は華やかではないにしろ、自然に通ずる風格を備えた美しさを持つ。しかし、「水の東西」のように、「それは西洋にはない魅力」というよ

うな論じ方をするのはどうだろう。

私は「本質を表す文化」は世界各地にあると思う。例えばイギリスのロックガーデン。ごつごつした岩の隙間を縫うように小さな花を植えていくあの庭には、厳しい山の自然の中ひっそりと強く生きる花の命すら感じ取れる。これは本質ではないのか？日本の「本質」と違うところがあるのか？

筆者は日本を愛するあまり、公平さに欠けている感を受ける。1970年代というと、日本はまだまだ工業化や経済成長を続けていた時期だ。筆者は其中で、表面的な豊かさを求めることで、日本古来の深みのある文化が失われてしまいかもかもしれないと、強い危機感を抱いていたのではなかろうか。

学習者の文章は、それぞれ一生懸命に取り組んだ様子が伝わるものであったが、その主たる傾向を上記の①～③に見ることができる。①は、この単元を通して新たな発見をすることができたというものであり、②は、山崎正和の論じ方の特徴について、授業者が示したことをふまえて、思考を深めたことが窺えるものである。③は、筆者の主張自体を肯定しながらも、筆者の論じ方については根拠を示して異を唱えている。また、授業者が示した時代性も考え合わせ、筆者が想定した読者についても思考を広げていることがわかる。

授業者がこの単元において大きな目標にしていたのは、「学習者のものの見方、感じ方、考え方を広げ、深める」ことであった。「重ね読み」の授業を通して、学習者が知識を吸収するだけでなく、自己の知識や価値観と照らし合わせて思考し、学習前よりも新たな視点を獲得できるようにしたいと考えていたので、これらの学習者の文章から、ほぼ目標が達成されたといえるのではないかと判断している。

問い方についても、「この文章を読んで、どのように考えたか」という曖昧な問いではなく、「筆者の述べた日本文化に対する考え方」または「筆者の論じ方」について、どのように考えるかというようにポイントを明確にして発問することによって、生徒が既存の知識や価値観を用いて自分の立場を考え、思考を深めることができたのではないかと考える。

(2) 教材の可能性の発見～「重ね読み」による効果～

今回扱った教材は、山崎正和の「演じられた風景」と「水の東西」である。授業者（小野）は、これまでの勤務校で、「水の東西」を扱った授業は何度も行ってきたが、「演じられた風景」は初めて扱う教材であった。今回、「演じられた風景」と「水の東西」を重ね

て読む授業を行ったことによって、高等学校の評論教材の“定番”である「水の東西」という教材を、改めて見つめ直すことができた。「マイクロティーチング」では、寺田寅彦の文章との「比べ読み」の授業を計画したことが契機となり、「水の東西」の特徴を再発見することができたが、さらに「アクションリサーチ実習」において、筆者山崎正和の別の文章との「重ね読み」の授業を作ることによって、「水の東西」を様々な角度から再分析し、本教材の新たな読みを発見することができたのである。

これまで「水の東西」だけで授業を行っていたときには、「西洋と日本（東洋）の比較（対比）」という点に着目させながら、「ありのままの自然の美を尊重する」ことが筆者の主張であるというように読解を導いていた。この読みは、「国語総合」担当で一般的に共有されている教材認識であり、定番教材「水の東西」の定番指導法であると言ってもよいだろう。前述のように、先行実践事例においても、「水の東西」だけを単独で用いているものがほとんどで、多くが似通っていた。「対比構造（二項対立で書かれていること）をおさえる」→「読解した内容を踏まえて自分の考えを書く」→「書いたものを基に交流したり、発表したりする」という活動に展開しているのである。生徒に書かせるテーマも、多くは「筆者が提示した具体例以外のもの」を考え、それについて書こう」「筆者の比較文化論を踏まえて自分の文化論を書こう」というものであった。

もちろん、「水の東西」のみで授業を創ることも一つの方法であるし、実践する学校によって指導方法が異なることは当然であるが、「学習者の思考力・記述力を高める」ために、「定番指導法」の殻を破り、多彩な実践を模索することが、教師に求められているのだと言えるだろう。その意味で、授業者自身にとって、今回の実習は、「水の東西」の定番指導法から脱却する良い契機となった。

その大きな要因は、「これまでの授業で行っていた読みは、筆者山崎の意図とは違うものであり、不十分なものだったのではないか」という「気付き」である。これは、単元を計画するために、「演じられた風景」と「水の東西」の出典である『混沌からの表現』を読み、原書におけるそれぞれの文章の位置づけを確認したことによって得られた「気付き」である。

「水の東西」の本文に、「日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじまげたり、粘土のように造型する対象ではなかったであろう。」という一節がある。これまでは、「対比構造」ということばかりに意識を置いて「水の東西」を読解していたので、この部分についても「西洋の噴水」が「水を

造型するもの」で、「鹿おどし」は「水を造型しないもの」(＝ありのままの自然の美を尊重するもの)と解釈していた。しかし、本文中に筆者が「鹿おどしは水を造型しないもの」と書いているわけではない。「流れる水」という美しい姿を見せるために「鹿おどし」という「仕掛け」によって、流れを「作って」いるとも言える。このように「演じられた風景」と重ねて読むことにより、「水の東西」の末尾の一文が、「鹿おどしは“流れる”という水の最も美しい姿を魅力的に見せるために作られた仕掛けである」と理解することができ、考えを深めることができたのである。

こうした授業者自身の「読みの深まり」を、学習者にも体験させることができるようにと留意しながら、授業計画を練った。

まず「演じられた風景」を先に読解させ、「日本の庭の自然美は、単なる自然の延長ではなく、『見立て』という営みを通じて理念化された自然美が反映されている、高度な作為の結晶である」という山崎の主張を把握させた。この読解を踏まえて「水の東西」を読むと、「そう考えればあの『鹿おどし』は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を現す仕掛けだといえるかもしれない。」という末尾の一文の深い意味が見えてくる。「演じられた風景」における“庭”も、「水の東西」における「鹿おどし」も、人の手が加えられた“仕掛け”であるということをおさえたいうえで、「筆者がこの特徴をどのように考えているか」というように、二つの文章を関連づける問題に取り組ませることにより、「自然本来の美しさ(魅力)が最大限に活かされるように作られている“仕掛け”」であるという特徴が、想定通りに学習者から出されたのである。

このような「共通する特徴を考えさせる発問」によって、二つの教材を関連づけて思考を展開させることができたが、このような問いは、「演じられた風景」と「水の東西」とを「重ね読み」したからこそできる発問であり、「水の東西」だけで授業を作っているときにはできなかった試みである。前述のように、この山崎の考えそのものについて、現代に生きる学習者たちがどのように考えるかということについても問いを広げることができたので、教材の扱い方に広がりが出たと見なすことができる。

このように、今回の実践では「水の東西」という教材の新たな可能性を発見することができたが、他の教材を扱う場合にも同じことが言えるだろう。先達から教えられてきた「教材研究の段階で原書に当たり、詳細に検討すべし」という、広く深い教材研究の重要性を改めて痛感した次第である。どの文章を教材とするにしても、その教材が学習者の学びにどのように貢献するものに

なるのか、学習者の力を総合的に育成することができる単元を創ることが可能な教材なのかを検討しながら、分析し、吟味していくことが重要なのである。

IV. 授業者としての今後の課題

「単元を計画する」ということの難しさと面白さを、この実践を通して学ぶことができた。「その教材の学習を通して、生徒にどのような力を付けたいのか」という問いの「教材の学習」の部分で、「単元」または「授業」に置き換えると、授業づくりについての問いになる。今回は模擬授業や実習など、短期間での授業計画であるので、先に教材を設定して授業を計画したが、勤務校で実際に授業計画を考える時には、生徒達の3年間を見通して学習計画を練らなければならない。生徒達の思考力・記述力を高次に導くために、1年次から3年次までに育成すべき力を検討し系統的に整理し、効果的なカリキュラムを考えることが必要である。

また、今回の実践で明らかになったように、「比べ読み」「重ね読み」のうち、いずれを用いるにしても、複数教材を用いて、学習者に考えさせる場を設定することにより、思考力が深まり、記述力が磨かれる授業を行うことが可能になる。さらに、教材の組み合わせ方によって、授業の幅を広げることができ、教室を豊かな学びの場とすることができる。だからこそ、教材をよく吟味し、それぞれの教材が持つ価値を引き出す力が授業者に必要である。学習者が学ぶことに充実感が持てる授業ができるよう、教材分析・研究を緻密に行っていききたい。

V. まとめ

高等学校国語科学習指導の改善が求められるようになって久しい。従来の「読んで、説明して、分からせて、暗記させる」という授業形態によって、生徒たちが黙々とノートをとっていたとしても、それで授業が成立していると言えるのであろうか。本稿において報告されている「比べ読み」「重ね読み」の授業の試みも、こうした問題意識に根ざしたものである。授業者(小野)は、広島県立呉三津田高等学校に在職する現職教員である。普通科高校のみならず、工業高校にも勤務した経験があり、多様な生徒たちを対象に、どのようにすれば思考力や記述力を高めることができるのかと心を砕いてきた。生徒の進路実現はもちろん大切なことであるが、教師はその先を見据えて授業研究を進めていかなければならないという使命感を強く持ち続けているのである。

さて、本稿で取り上げられた「水の東西」の指導法は、授業者自身の反省を踏まえたものであり、「対比構造」の理解を軸としたステレオタイプの教材分析と授業展開に風穴を開けるものとして意義深いものとなっている。

「水の東西」のこれまでの指導法は、対比構造を図式化したり、「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」という三つの対比的表現の具体的な内容を理解させたりするというものであった。近年は本教材の発想法を利用して、「楽器の東西」「食文化の東西」など適切な話題を探させて論じさせるという表現活動に展開する事例も見られるようになったが、教材の表面をなぞっただけの模倣文になりがちで、かえって読みの浅さを露呈するというきらいがあった。

それに対し、この実践では、見逃されがちな末尾の一文「そう考えればあの『鹿おどし』は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだと言えるかもしれない。」のとりわけ「仕掛け」という一語の意味を、「演じられた風景」との「重ね読み」によって抽出した。そこに教材研究としての大きな意義を見いだせるであろう。

また、寺田寅彦(1935)の「西洋人は自然を勝手に手製の鋳型にはめて幾何学的な庭を造って喜んでいるのが多いのに、日本人はなるべく山水の自然をそこなうことなしに住居のそばに誘致し自分はその自然の中にいだから、その自然と同化した気持ちになることを楽しむとするのである」(p.221)という指摘と比べ読みをすることで、山崎のとらえ方の特質を明らかにしていく手法も、教材開発という点において意義深いものである。

こうした授業研究を積み重ね、三年間を見通したカリキュラム作りの中で、「思考力・記述力」を高める学習指導法の開発を進めていくことを期待したい。

【謝辞】

この度のアクションリサーチ実習でメンターとしてお世話になった広島大学附属福山中・高等学校の重永和馬先生、井上泰先生に、心から感謝申し上げます。

【注】

- 1) 先行実践事例については、インターネットで「水の東西、指導案」というキーワードを用いて検索したところ、指導案としての要素が整っているものを11例見つけることができた。そのうち授業者(研究者)名・学校名が明記してあるものは4例のみであった。刊行文献2例については、本稿末【参考文献】の項参照。
- 2) 「アクションリサーチ実習Ⅰ」は、平成23年6月13日(月)～6月24日(金)の10日間、小野奈央が、広島大学附属福山中・高等学校4年生2クラスで行った。

【参考文献】

- ・寺田寅彦『寺田寅彦全集第十巻』岩波書店、1961年(随筆「日本人の自然観」の初出は1935年)
- ・山崎正和『混沌からの表現』ちくま学芸文庫、2007年(初版1977年)
- ・端野由美子「高等学校における評論指導の構想―育成すべき国語学力への見直しにもとづいて―」(修士論文)福岡教育大学大学院、2009年
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版、2010年
- ・菅原敬三『中学校、高等学校国語科の教材研究と教材の扱い方』溪水社、2011年